

地適応を生態学の面から明らかにする上で有効だと考えている。

論 文

好広真一, 1974. 上信越のニホンザル(1)。モンキー, 139・140: 40-45

好広真一, 1975. 上信越のニホンザル(2)。モンキー, 141: 26-31

学 会 講 演

好広真一・常田英士, 1976. 志賀高原横湯川流域のニホンザルの個体数変動。第23回日本生態学会

屋久島におけるニホンザルの地域個体群の生態学的研究

Q 増井 憲一(京大・理)
好広 真一(同 上)
桜井 道夫(同 上)
福田 史夫(マカク研究会)
東 滋(京大・霊長研)
足沢 貞成(同 上)

(1) ニホンザルの生活を環境との関係において把握することを目的として、屋久島西部(研究林予定地)に生息するニホンザル自然群を対象に、

- 遊動, 群れサイズ, 行動の夏季と冬季の比較
- 島内でも冬期には降雪をみる地帯にすむ群れの垂直分布の調査
- 遊動中など自然状態におけるニホンザルの行動, 音声などの観察・記録
- 生息環境の調査

をおこなった。

(2) a. 西部村道集中調査と登山道センサス。

b. 多方面の資料収集。

c. 国割岳西斜面に観察ルート設置。

調査の経過: 50年7月16日上屋久町永田着。17日, 西部林道半山に Camp 設営, 8月9日まで Base Camp とし, 海岸ぞいに永田から瀬切川までの約 10 km の区間にて, 群れの分布, サイズ, 遊動, 食性などの調査を集中的におこなった。調査には, グループメンバーの5名と対応者の東のほか, 多くの人々が参加し, 延14名となった。8月10日から14日までは, 1パーティーは, 安房から屋久杉ランドの餌付け群観察へ向い, 1パーティーは, カンカケ岳より国割岳に向って, 垂直分布調査に出发したが, ヒル, 蚊, 雷雨のため, 国割岳直下より引き返さざるをえなかった。

結果: 屋久島西部林道には, 6~7群が隣接して生息している。このうち, 5群について, 頭数と構成が調べら

れた。サイズは, 15~50頭であった。調査期間中, サルたちは, アコウの実にその食物を強く依存しており, 遊動範囲は, 極めて小さかった。

資料はまだ整理中であるが, 昨年の調査分とあわせて, 全ての記録をまとめて雑誌「にほんざる」に発表の予定である。今回の調査によって, 西部林道における群れの分布はほぼ確実に把握しえたと考えられ, 今後は, 季節的变化とサルの生活との関係など, 1つ1つのテーマごとに集中的調査をすすめてゆくことが可能になったと言えよう。

房総丘陵・高宕山地区・石射太郎餌場に出るニホンザルの社会学的・生態学的研究

○

上原 重男(京大・理)

岩野 泰三(東大・理)

福田喜八郎(東大・農)

高宕山地区石射太郎餌場のニホンザルT-I群は, 天然記念物であるにもかかわらず不法な攻撃にさらされてきたため, 従来から個体群の動態や個体間関係に注目して調査研究をおこなってきたが(研究成果1, 2参照), ここでは最近とりまとめたニホンザルのフンの形態的変異について報告する。

従来フンの調査は房総丘陵の全域を対象にしてきたが, 一般の野外で採集されるフンは排泄後の時間経過がまちまちで厳密な比較研究が難しく, また形態変化が著しい場合他の動物との識別が困難となりがちである。

この点石射太郎餌場の餌付け群は野生味を比較的良好に保存する理想的な研究対象であるため, 1975年度を通じてこの群れを主たる対象にフンの形態を調べた。

ニホンザルのフンの形態にはかなりのバラツキがみられ, 特に冬期の三角むすび形のフンはよく知られている。このようなバラツキを, フン構成物質の原形保持能力と消化管内のフン塊形成作用の2因子から生成論的に一貫性のある類形区分を試み, 8類形を認め, 各類形別頻度分布の周年的変化を調べた。

フンの形態的変異は各月ともかなり著しいが, 頻度分布のモードの位置にはすでに知られた食性の周年的変化と対応する季節的な特徴がみられる。すなわち, 生理的に活性化した冬芽ないし枝先食いの2・3・4月に典型的な三角むすび形のフンが多く, 若草食いの目立つ5・6月に軟便でやや大型の平滑円筒形のフン(しばしば鮮緑色ないし鮮黄色)が多い。他の時期には中間的な位置にモードが現われる。

研 究 成 果

1. 長谷川寿一・平岩真理子, 1976. 高宕山第I群調査報告(2) グルーミング行動からみた社会関係。第20回プリマーテス研究会。

2. 平岩真理子・長谷川寿一。1976。高岩山第Ⅰ群調査報告(1)ポピュレーション構成。第20回プリマール研究会。
3. 岩野泰三・高杉欣一。1975。房総丘陵のニホンザル、千葉県生物。pp. 108-119。日本生物教育会第30回全国大会(千葉大会)実行委員会。「千葉県の生物」編集部編。
4. 小金沢正昭・高杉欣一。1976。房総丘陵におけるニホンザルのフンの形態の季節変化。第20回プリマール研究会。

ニホンザルにおけるオスとメスの特異的な空間的近接



北村 光二(京大・理)

高崎山A群、B群の観察を通じて、それぞれの群れの内部において、オスとメスとは単にランダムに寄り集まっているのではなく、特定のオスと特定のメスが特異的に近接するように存在していることに注目して、この現象を集中的に記載した。

この社会現象の記載において、対面的相互作用は1種のコミュニケーションの過程として扱われた。挙動を呈示する個体は情報の送り手であり、対面する他の個体はその受け手である。従って、1) これまである1つの社会現象として記述されてきた事柄は、その相互作用に参加しているそれぞれの個体にとっての状況として、それぞれに記載された。2) 観察者の抱いた印象は、そのような情報を受け取った第3者の反応として、個体の行動の記載と並置して記載され、考察の手がかりとなった。

このような視点を用いてなされた記載からこの現象の一般的特性が抽出された。1) メスが特定のオスに一方的に追従する。2) あるオスに特異的に近接するメスは、個体維持におけるアドバンテージを獲得している。これは、メスがそのオスに近接していない時に比べて近接している時に、より優位な個体としてふるまうことができることを意味している。従ってこれは、*近接の効果、と名付けられる。3) オスとそれに特異的に近接しているメスとの間にはさまざまな程度で親密さが認められるが、それは*近接の安定性、の漸層的差異として区別される。

そして次のような、ニホンザルの社会の一般的特性についての討論が可能になる。1) 劣位な個体が優位な個体に近接しようとする活動が一般的に存在する。これは*フォロワーシップ、と名付けられる。2) この活動は*近接の効果、を先取りしている。3) *近接の安定性、は*近接の効果、を顕在化させる。このことは順位形成の過程を理解する手がかりとなる。

香春岳におけるニホンザル野生群の生態学的研究



池田 啓(九大・理)

江口 和洋(同上)

香春岳では1974年以来、個体数の変動、遊動域の変化を中心に捕獲後の追跡調査を継続している。1975年は4月と9月に各10日間の調査をおこなった。

1) 個体数

4月の調査ではカウントをすることができなかったが、9月27日に群れが車道を15:24~16:00にかけて渡り、A♂4, YA♂1, A♀10, 4才3, 3才2, 2才3, 1才3, Baby 8, 合計33頭が数えられた。9月28日に同じ場所で9:45~10:50にかけて、A♂2, YA♂2, A♀8, 4才0, 3才2, 2才2, 1才2, Baby 7, 合計26のカウントができた。前年からひきつづき出生率が高く個体数は増加傾向にあるものと思われる。

2) 遊動

4月、9月とも群れはある地域に数日にわたり滞まる傾向を示した。4月には12日から23日にかけ、香春岳の西側に位置する五徳地区の竹林、9月には24日から29日にかけてムクを中心に採食して香春岳の二の岳東斜面にある神宮院一帯を群れは遊動していた。1日当りの遊動距離は4月で最短0.53km, 最長0.87km, 調査期間中の平均0.71kmであり、9月で0.15~0.82km, 平均0.44kmであった。捕獲の同じ月における遊動距離は1973年4月12~23日で0.68~2.30km, 平均1.53km, 1972年9月27~30日で0.82~2.13km, 平均1.59kmであった。4月、9月とも1日当りの遊動距離が捕獲前のものと比べかなり短くなっている。このことはa) 群れが一定地域に数日にわたり定着しているなど遊動パターンがこれまでとちがってきている。b) 植生には捕獲前と後で大きな変化がないにもかかわらず遊動域の広がり狭くなっていることによるものと思われる。

下北半島におけるニホンザルの生息環境としての森林の植生構造と森林施業

荻野 和彦(京大・農)

下北半島のブナ・ヒバ林がニホンザルの生息環境として、どのような植生構造をもち、そこでなされる森林施業がどのような影響を与えるのかを明らかにするため、前年にひきつづき調査をおこなった。

調査地域は下北郡大畑町、大間町、佐井村にまたがる。前年度に設定した6コの永久調査プロットにつけ加え、あらたに2コのプロットを設けた。合計8コのプロットはブナ択伐、漸伐施業区、ヒバ択伐施業区および無施業区から選びだされたもので、プロット内の全立木の